

教職論の今日的な課題

— 平塚益徳のキリスト教的教職論の検討 —

小 幡 幸 和

1. はじめに

平塚益徳(1907－1981)は九州大学名誉教授、国立教育研究所所長(在任1963年－1978年)、ユネスコ本部教育局局長、日本比較教育学会会長、そして1963年(昭和38年)から1981年(昭和56年)まで(旧)中央教育審議会(以下、中教審)の委員を務め、現在に続く教育学および教育行政に多大な貢献をした人物と言える¹。平塚はまた、自身の出自がキリスト教の牧師家庭であることも相まって宗教学や聖書学の研究にも携わっていた。平塚は決して教派的宗教教育を推進した人物ではないものの、古代ユダヤや西洋のキリスト教思想史に関する知見がその著作の随所に見られ、教育学界や教育行政の中心にあって公教育について語り著していた際にもその宗教的見解を間接的であるにせよ織り交ぜていた点にその教育学の大きな特徴がある。

平塚が教育学者として一貫して主張したことには、戦後の日本における教育が戦前の誤った教育に対する行き過ぎた反動であったとする主張や²、ユネスコが唱えた生涯教育を日本で実現すべきという主張があった³。そして、それらの主張の一部は現行の教育基本法(2006年)や新学習指導要領(2017年)で付加され強調されることとなった「公共の精神」や「道徳」といった点にその結実を見ることができるものと言える。一方、教育学と宗教の関連づけの元に導き出された平塚の教育観は、現在の教育学、とりわけ教職論において議論されている問題といかなる関連があるのか必ずしも明確ではない。そこで本稿では、現代の教職・教師に求められている課題を、教育と宗教は不可分とした平塚の教育観から考察した時に何が見えてくるのかを検討していきたい。

平塚益徳に関する先行研究としては、モンテッソーリ教育に対する平塚の関心とその背景に関する竹田恵の研究がある。平塚の育った牧師家庭という環境に注目した竹田は、平塚の家庭教育観、道徳教育観の背景に、温かい父母を中心とする貧しくも明るい家庭、そして父・勇之助の武士道的キリスト教精神があったことを明らかにしている⁴。平塚の著作は膨大な量に及び、教育学関連の著作だけでも全5巻の著作集⁵や全3巻の講演集⁶がある他、教育学とは直接的な関わりがないキリスト教関連の小論等、上記に含まれないものも多数ある。本稿では、そうしたキリスト教関連の著作もふまえて検証を行うこととした。

以下では、キリスト教関連の資料も用いながら改めて父・勇之助との関連で平塚益徳の生涯を振り返ったうえで、今日の教職論、教師教育についての課題から人間教育、継続教育、国際教育の問題に触れ、それらの課題を平塚がどのように認識し、考察したのかを検

証していくこととする。

2. 平塚益徳の生涯

平塚益徳は1907年（明治40年）、東京・小石川区にあった上富坂基督教会の牧師、平塚勇之助（1873－1953）の子として東京に生まれた。竹田が指摘するように平塚益徳に大きな宗教的影響を与えた父・勇之助であるが、勇之助の牧師としての特徴やその活動のキリスト教史的意義は必ずしもこれまで明確にされていない。戦後に設立された茨城キリスト教学園では、その学園史の前史としての「種蒔き人」、つまりこの学園が茨城県北地域に創設される遠因となる働きをした人物として平塚勇之助が紹介されている⁷。現在の茨城県常陸大宮市北部、旧塩田村長沢の出身であった平塚勇之助は、明治後期に自らが行っていた故郷でのキリスト教布教活動に仲間の米国人宣教師を招き入れることで、大正年間に米国人宣教師の団が主に久慈川沿いの地域で宣教の拠点を造るきっかけをもたらした人物と言える。その宣教拠点を中心として形成された日米キリスト教徒のネットワークが太平洋戦争後の日立市における茨城キリスト教学園の創設に深く関わったことを鑑みるときに、平塚勇之助を茨城キリスト教学園創設の「種蒔き人」ととらえることは正しいと言えるであろう。

一方、平塚勇之助の働きは、日本のキリスト教史全体から見ればより多様な意義を持ったものといえる。皮肉なことに水戸学の学者で排耶思想でも知られる会沢正志斎の親戚筋にあたる母を持つ勇之助は⁸、十代後半で東京に出た後に米国人宣教師から英語を習ったことがきっかけでキリスト教徒となっている。さらには、二十代半ばに書生として渡米し、カリフォルニア州サンフランシスコやサリナスの日本人教会で活躍しているが、渡米にあたってそうした教会への紹介状を書いたのが同郷のキリスト教徒で米国留学の先輩でもあった根本正（後の衆議院議員）⁹であった。三十才で帰国した後、勇之助は東京・小石川区で伝道活動をしていた米国人宣教師夫妻を助ける形で牧師活動を始めるが、その牧師活動は明治後期から太平洋戦争中まで、実に約40年の長きにわたるものであった。また、自らが属するキリスト教の教派にあって指導的立場を占めた他、英書の翻訳¹⁰や米国人宣教師との交流などでも多大な貢献をしている¹¹。

勇之助はまた家庭においても宗教的涵養を欠かさなかった。益徳は後に、牧師家庭の日課として食前の祈り、夕食前の聖書朗読が欠かさず行われたと記している。また、益徳の小学校時代には月に2、3度は土曜日の夜に「家庭学芸会」なるものが開かれた。そうした際には父は讃美歌を歌い、子ども達が交代で学校で習ったことを家族に伝え、最後に家族の皆で讃美歌を共に歌ったのであった¹²。

1920年（大正9年）から1925（大正14年）の間、益徳は兄・道雄に続いて聖学院中学に通った。ディサイプルス派のミッション・スクールであったこの学校では、同派所属の牧師の子は学費が無償という決まりがあった。益徳の父は厳密に言えばこの派の牧師ではなかったが、この派と歴史的関係が深い基督教会（キリストの教会）派の牧師であったこと、そして聖学院中学の校長石川角次郎が益徳の父の知り合いであったこともあり無償でこの中学校に通ったという¹³。益徳はまた、聖学院の初年度1920年に上富坂基督教会で父親から洗礼を受けている¹⁴。中学校時代の益徳はさらに、子どもを対象に聖書を教える日曜学

校の補助教師をこの教会で勤めている¹⁵。

1925（大正14年）、益徳は父の故郷茨城にある旧制水戸高校に入学する。東京の家族と離れて暮らした旧制水戸高校2年次の頃には、同高の基督者青年会幹事を務め、毎週水曜日の夜に大工町といった水戸市内の繁華街にキリスト教信者の友人と赴いて布教活動（路傍伝道）に励む傍ら、キリスト教に関心を持った「求道者」と市内の牧師を自らの学生寮に招いて聖書研究会を開催したという¹⁶。平塚の所属した教派である基督教会（キリストの教会）は、とりわけ米国人宣教師においては布教活動等の実践に比べてキリスト教神学の研究は軽視しがちであったが¹⁷、平塚はこの旧制高校時代からルドルフ・オットーの『聖なるもの』をはじめとして宗教学・キリスト教思想の書物を読みあさったという¹⁸。そのため一時は神学校、また東京帝国大学の宗教学専攻進学を目指した平塚であったが、先輩の種々のアドバイスがあったことに加え、ペスタロッチの人間愛に基づく教育の生涯に深い興味を持ったこともあり、旧制高校の3年次秋には教育学専攻を志すようになる¹⁹。

平塚が東京帝国大学文学部教育学科に入学した1928年（昭和3年）、茨城から東京に戻った平塚は父親の教会での活動を再開するとともに、その教会が属する教派である基督教会（キリストの教会）が新規に刊行することとなった機関誌『道しるべ』の編集に携わっている。この機関誌は、自動車部品販売業で成功した米国人富豪でありこの教派の会員であったジョージ・ペパダインが1928年の世界旅行の途上で友人宣教師を訪ねるために日本に滞在し、教派内の連絡強化と伝道促進のために機関誌を創設する考えに賛同して資金を提供したものであった²⁰。太平洋戦争開戦直前の1941年10月まで発行されたこの機関誌は、発行者は米国人宣教師であった一方、記事執筆のほとんどは日本人教役者と信者の手によってなされていた。一部に米国人宣教師による記事投稿があったものの、そのほぼ全てが日本語に翻訳されていた。この雑誌の初代の編集者を務めた益徳は、この仕事によって学生にとっては十分な報酬を得ることができたと後に振り返っている²¹。

さて、東京帝国大学において教育学専攻の学生となった益徳であったが、しばらくは教育学の学びに満足できず、宗教学やインド哲学の講義をさかんに聴講し、また学内の友人と「ペスタロッチ研究会」を結成していたという²²。そして、平塚が取り組んだ卒業論文のテーマは、旧約聖書にみられる古代ユダヤの教育であった。このテーマは必ずしも恩師であった吉田熊次が喜んで認めたものではなく、吉田は「やるなら（勝手に）やって見たまえ」という態度であったという²³。平塚は大学2年次にヘブライ語の演習に参加していたこともあり、この研究に際してヘブライ語の原典にあたっている。また、大学の先輩を通して当時青山学院にいた高名な旧約聖書学者であった渡辺善太の指導も受けている。こうして600字詰め原稿用紙で400枚近くに及んだという卒業論文は、平塚と同じ教会に通うキリスト者であり水戸高校時代の学友でもあった山根勝亮の実家において、山根の清書によって完成したという²⁴。そして、結局、吉田熊次もこの論文を評価し、吉田の支援によって『旧約聖書の教育思想—智恵文学を中心として』として出版されたのであった²⁵。

益徳はその後、1931年から1935年まで東京帝国大学大学院で教育史を学びつつ、青山学院神学部やフェリス和英女学校高等部講師を務めている。また、父が牧師であった上富坂基督教会の長老も務めた岩井千代三の娘八重子と1933年に結婚した。大学院時代にはモンテッソーリ研究をはじめ、キリスト教と教育の関係に関心をさらに深め、その成果は後の

『日本基督教主義教育文化史』²⁶として出版されるに至っている。その後平塚は、1936年から1938年まで国民精神文化研究所嘱託となり、その間、吉田熊次の下で『日本教育史資料書』の編纂に携わっている²⁷。

さらに平塚は、前述の日本におけるキリスト教主義学校の研究を発展させ、西洋のミッションと東アジア文化におけるキリスト教の受容という同様の視点から中国におけるキリスト教主義学校の研究を進めた。興亜院政務部より出版された『近代支那に於ける基督教々育の概況』²⁸では、中国におけるキリスト教主義学校について分析されている。この中で平塚は、中国への西洋的なキリスト教宣教がうまくいっていないことを正しく指摘すると同時に、中国に残存する西洋礼賛の態度を日本の基督教徒が正すことができ得ると指摘し、そのためにも、まず日本が西洋礼賛をやめねばならないとの主張を展開している²⁹。さらに1939年から1944年まで広島高等師範学校の講師・教授を務めた平塚であったが、この間、1943年には大東亜省「在支研究員」として中国にわたり、主にカトリック宣教と教育の関係を研究している。そして、帰国後の1944年に九州帝国大学法文学部の教授に就任したのであった（51年からは教育学部教授）。

平塚の海外経験で特筆すべきは、1960年1月にユネスコ本部教育局局長に就任し、2年間パリに滞在したことである。ユネスコ本部に在任中に教育局の仕事の一つとして取り組んだのが成人教育（継続教育）であり、これは平塚にとって生涯にわたって重要な課題となっていく³⁰。また、帰国後も1963年に日本ユネスコ国内委員会委員に就任、1965年にはドイツ・ハンブルクのユネスコ教育研究所の理事に就任した他、1966年10月にパリで開催された第14回ユネスコ総会に日本政府代表顧問として出席もしている。その後もユネスコ関連の出張等でアジアをはじめ世界各地をまわり、1980年には日本ユネスコ国内委員会名誉会長となっている。

一方、行政との関わりも平塚の重要な教育学上の貢献として挙げられる。1962年10月から1970年6月まで文部省教育課程審議会委員を務めた平塚は、1963年5月から1981年までの間、中央教育審議会委員を、さらに1963年10月には文部省社会教育審議会委員に就任している。

教育学界への貢献も種種にわたっていた。1963年7月から1978年7月まで国立教育研究所所長を務めたが、この間、同研究所から10巻にわたる『日本近代教育百年史』を刊行している。また、1958年に日本教育学会の理事に就任した他、1965年には日本比較教育学会の創設に関わり同学会の初代会長に就任している。また、1977年には世界比較教育学会第三回大会で会長に選出されたのであった。

このように教育、学界、教育行政に多忙な平塚であったが、キリスト教徒としての実践や、自らの出自教派である「キリストの教会」派との関係も保ち続けている。例えば、1950年に米国の教員養成大学視察のために渡米した際にはアビリン・クリスチャン大学を訪問し、同派の米国人会員と交流を持っている³¹。また、九州大学教員時代に東京に来た際には、上富坂基督教会の会員らが引き継ぐ形で戦後に創設された御茶の水キリストの教会で礼拝に出席し、説教も担当することがあったという。同派の米国人宣教師が説教では聖書の言葉自体を中心に語ることを是としていたのに対し、平塚の説教には新渡戸稲造の武士道的キリスト教や自身の体験談がキリスト教的メッセージにうまく取り入れられていたという³²。

3. 現代の教職・教師に求められている諸課題と平塚の見解

A. 豊かな人間性と社会性

教職が人間を相手にする職業である以上、教師自身の人間性が常に問われるのは言うまでもない。平成17年の中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、優れた教師の条件として「教職に対する強い情熱」と「教育の専門家としての確かな力量」に加えて「総合的な人間力」が挙げられ、その説明として「教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である」と記されている³³。これらには、人間性や教養といった共通項目が見られる。

平塚はまた、教師の資質としての教養の重要性についても繰り返し述べている。例えば、ユネスコが掲げた「教員の地位に関する勧告」³⁴に見られる精神がまだ日本に浸透していないと問題視した際に、専門職としての教職には以下の四つの要素が必要であると平塚は指摘している：1) 堅固な使命感と高い精神性、2) 高い技術力が求められる客観的な資格、3) 在職中の継続的な研鑽、そして4) 公的性格と自立性³⁵。ここで、精神性のもととなるのは「言葉の正しい意味での教養人たること」であるとし、教養人とは「決していわゆる『物識り』ではなく、『心が耕された人』なのである」³⁶としている。そして、聖書にある「種まきの例え」を思わせる記述によって、「よく耕された土地に種を播けば、すくすくと成長する。逆に耕されていない土地にいくら種を播いても十分に成長しません。ですから、教養という真の意味は謙遜な気持ちをもって絶えず外部からの良い教養を自分の心の中に吸収することです。従って、少しばかり本を読んで、知識をひけらかして、威張っているような人は決して教養（人）ではないのです」と記している³⁷。

さらに、人間と人間の「魂の交流」こそが教育の本質であるとし³⁸、世界の教育学者と対話を重ねた平塚は、教員に求められる教養として宗教をも念頭においていた。それは以下の言葉にもみてとれるものである：「日本の知識人は、世界の中で、最も宗教について無知な者が多いといわれている。しかも、このことはとくに教師の間に見出されるのであって、これこそ、まさに日本の教育の一大盲点となっているのである」³⁹。

また、上記中教審答申にある人間性と社会性の結びつきという観点も平塚がしばしば指摘した点であった。そもそも平塚は、教育において見失ってはならない普遍的な人間観として、理性的な人間（ホモ・サピエンス）、自己反省する人間（ホモ・パティエンス）、働く人間（ホモ・ファーベル）、心と体の余裕を持つ人間（ホモ・ルーデンス）、経済に携わる人間（ホモ・エコノミクス）、政治・社会生活に携わる人間（ホモ・ポリティクス）のバランスを取っていることを挙げる⁴⁰。さらに、人間の教育には「個人」と「社会人（世界市民）」の二つの側面があるとすした平塚だが、特に強調したのは後者であり、それは「家族の一員、よき近隣社会の一員、よき地域社会の一員、よき国民、よき国際人」という側面であるとしている⁴¹。

こうして教育における人間性・社会性の大切さを語った平塚であるが、とりわけ世界の教育関係者・学者との交流においては平塚自身の人柄のよさが際立っていたという指摘が多い。例えば、小林哲也は平塚の人柄の良さが国内のみならず海外でも広く知られていると記し、平塚を国際人たらしめたものは学識だけでなく人柄であったと記している⁴²。また、讃美歌を歌うことが普通であった家庭に育った平塚は、海外の教育学者の交流の際にも讃美歌を歌ってみせることがあった。その平塚についてイエール大の教育学者であったジョン・S・ブルーベッカーは「すべての人々に対し、宗教的ならびに道徳的なきわめて深い思いやりの心」を持つ人であったと記している⁴³。

一方、平塚にとって人間性の涵養は家庭教育、学校教育、そして継続教育としての社会教育という一連の流れの中でなされていくべきものであった⁴⁴。この継続教育の視点は平塚がひととき強調したことのひとつであると同時に、教師の継続的な学びという観点から現代教職論の重要な課題ともなっている。

B. 学び続ける教師（生涯教育）

教職の、専門職としての社会的評価の低下や社会環境の変化に伴う社会からの期待度が増加したことを鑑み⁴⁵、中教審は平成24年8月の答申で「学び続ける教員像」⁴⁶を提言するとともに、平成27年の答申においては、「これからの時代の教員に求められる資質能力」の一つとして「これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力などが必要である」ことを掲げている⁴⁷。

また、茨城県教育委員会は「茨城県公立の小学校等の校長及び教員の資質の向上に関する指標」の中で、「自己の現状と課題を知り、他の教員の指導や意見に耳を傾け、学び続けることができる」ことを教員として求められる基本的な資質として掲げている⁴⁸。

平塚は、「教師論」と題された論考の中で学校教師のあるべき姿について記しているが、この中で前述の「教養」の要素に加えて記されているのが「子どもが好き」という姿勢、そして、とりわけ国際的な新しい動向に対処するために、生涯にわたって教師としての専門的学術・技法の習得に携わるという姿勢であった⁴⁹。平塚のこの指摘は、「質の高い教育をみんなに」というSDGsの精神が今日の教育界に影響を与える中での一つの帰結として、より高い次元での教職の専門職化が求められていることとも合致しているといえよう⁵⁰。

元文部大臣の永井道雄は、昭和56年（1981年）、すなわち平塚死去の年の中教審最終報告に加えられた生涯教育についての答申について「さいごまで教育について考えつづけられた故平塚先生の精神を反映」したものであったと記している⁵¹。平塚はこの継続教育について「教師の教師たる最高の要請は、それが決して完成者としてではなく、目的に向かい、理想をめざして常に精進するところにあるという点である。この意味でよき教師は常に『夢みる人』であり、『求道者』であって、その精神は常に若々しく潑刺たるべきなのである」⁵²とも記している。新約聖書の使徒パウロの言葉をも彷彿とさせるこの表現からは、教師が学び続けることが必要なのは、宗教者が生涯をかけて探求を続ける点と同じである

との平塚の理解が示唆される⁵³。

C. 国際性

文部科学省の中央教育審議会は、平成18年の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、教員に「今後特に求められる資質能力」があるとし、その一つとして「地球的視野に立って行動するための資質能力（地球、国家、人間等に関する適切な理解、豊かな人間性、国際社会で必要とされる基本的資質能力）」を挙げている⁵⁴。

これまで記してきたように平塚は教育の研究に際して若いころから日本の外にも目を向けたわけであるが、実際にユネスコで活動した体験もふまえつつ、日本の教育界に必要な国際性のあり方を繰り返し記している。平塚は、日中戦争から太平洋戦争終戦までの日本における教育を、自分の国だけのことを考え、また「他国侵略と思想統制」を旨とするジャコバン・ナショナリズム（国民主義）として批判する一方、ヒューマニタリアン・ナショナリズム（国民主義）の重要性を説いている。平塚によれば、ヒューマニタリアン・ナショナリズムとは「もちろん自分の国に対しては熱烈な愛国心をもちつづける。しかし、自分の国の良い点は伸ばすが、悪い点は常に反省する。そして自分の国をよくすることによって世界を良くしようとする」⁵⁵ことであり、そのような意味での「愛国心」を教師も確信すべきであると繰り返し主張している⁵⁶。これは、冷戦下のソ連を含めて西洋諸国の教育を比較した中で「先進国家群は全て自国を大切にする教育に熱心」⁵⁷であるとの確信に至ったことも影響していた。その意味で平塚は、国家でなく「世界」に属するという「コスモポリタン」の考え、あるいは平塚が「国籍喪失」と呼ぶ人間観を強く非難する。「まず第一に国があって、そのインターというところに、ほんとうの人道主義的な国民主義がなりたったと思います。このナショナリズムこそユネスコが考えている国際協力の基盤なのです」⁵⁸というのが、平塚がユネスコでの活動を通して得た知見であった。

そして実は、この「ナショナリズム」観こそが平塚がキリスト教主義学校の研究をした中で培ったものでもあった。戦前から日本、中国等のキリスト教主義学校（ミッション・スクール）を研究した平塚であるが、一貫しているのは、西洋のキリスト教が非西洋社会の文化を見下したり抑圧してきたという、西洋キリスト教宣教師への批判的視点であった。戦前の日本においてキリスト教主義学校が弾圧されてきたことを踏まえつつも、戦後教育における宗教教育のあるべき位置については「慎重にして厳正なる学問的根拠に基づく方向付けと位置づけとがなされなければならぬ」とし、「本国固有の教育伝統・・・とのよき階調をもつミッション・スクールの在り方こそ、正に以て討究さるべき重要な教育問題であることを確信」するとし、「ミッション・スクールは互に広き世界文化的基盤に立つと共に、各国固有の社会形態の必然的、自然的算出物たるの実を具えるべく、他国よりの借りもの的色彩を示すが如きことは許さるべきでない」⁵⁹と記しているのである。平塚がこの文章を記したのは太平洋戦争後の連合軍占領期であり、所謂「キリスト教ブーム」が起こると共に日本各地に基督教主義学校が設立または再建されていた時代であった。そのような時代の風潮に合わせるだけでなく確固とした文化観・キリスト教教育観を持っていたのは、戦前から日本と西洋の宗教学やキリスト教思想を深く学び、自らがキリスト教伝

道の実践に携わると同時に東アジアにおける西洋のキリスト教宣教の歴史に懐疑的になっていた平塚ならではの視点と言えるであろう。

- 1 平塚益徳の教育に関する業績については以下に詳述されている。平塚博士記念事業会編『追憶 平塚益徳博士』平塚博士記念事業会、1982年。また、キリスト教関連の事典にも項目がある。平塚敬一「平塚益徳」、日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、1175。
- 2 例えば平塚は、「戦時中の行き過ぎた超国家主義の、望ましい反省ではなくて、まさにその反動として、現下わが国社会、特に教育の世界には、国家、伝統からの行き過ぎた離脱が目に見える」と記している。平塚益徳「日本の教育の将来」『教育と医学』24号、1976年、1010頁。
- 3 こうした主張は平塚の著作の随所に見られるが、簡潔にまとめられているものとしては以下の書がある。平塚益徳『日本教育の大勝利—日本教育史から見た現状と将来』カルティヴェイト21、1981年。
- 4 竹田恵「平塚益徳とモンテッソーリ教育再導入—家庭教育の視点から」『鶴川女子短期大学研究紀要』35号、2017年、47-56頁。その他、中国における基督教主義学校に関する平塚の分析に限った評論、言及に以下がある。智新「中国近代史における教会系学校の役割：平塚益徳の教会系学校研究批判（1）」『国際教育研究』9号、1989年、1-8頁；渡辺佑子「近代中国におけるプロテスタント伝道：『反発』と『受容』の諸相」東京外国語大学博士論文、2006年、129頁。
- 5 平塚博士記念事業会編『平塚益徳著作集』教育開発研究所、1985年：第1巻『日本教育史』、第2巻『中国近代教育史』、第3巻『西洋教育史』、第4巻『宗教・道徳・家庭教育』、第5巻『教育持論』。
- 6 平塚博士記念事業会編『平塚益徳講演集』教育開発研究所、1984年：第1巻「世界の中の日本の教育」、第2巻『日本教育の進路』、第3巻『民主主義社会と道徳教育』。
- 7 茨城キリスト教学園60年誌編集委員会編『茨城キリスト教学園60年誌図録』茨城キリスト教学園、2010年、6頁；『シオンの丘 五十年—茨城キリスト教学園高等学校五十年・中学校三十五年誌』茨城キリスト教学園高等学校、1997年、15-17頁。
- 8 平塚勇之助『神によりてやすし—平塚勇之助自伝』ヨルダン社、1989年、5-7頁。会沢正志斎の排耶思想に関する最近の研究には以下がある—竹中淳「会沢正志斎の排耶思想に関する基礎的研究：『排耶集』からの影響関係を中心として」『中国文化：研究と教育』76号、2018年、53-64頁。
- 9 根本正については、根本正顕彰会調査研究委員会編『根本正の生涯』根本正顕彰会、2001年を参照。
- 10 ジェッセー・エル・ハールバート『四福音書研究』稲澤謙一・平塚勇之助訳、中庸堂書店、1904年。
- 11 平塚勇之助については、上記の他に以下を参照：平塚道雄・平塚益徳編『慈川余香』広池学園出版部、1967年；平塚敬一「平塚勇之助」、日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、1175；吉田亮「日本教化のためのカリフォルニア日本人伝道：E・A・ストージの日本人伝道観の形成」『キリスト教社会問題研究』43号、1994年、30-115頁；Shawn Z. Daggett, "The Lord Will Provide: James A. Harding, J. M. McCaleb, William J. Bishop, and the Emergence of Faith Missions in the Churches of Christ, 1892-1913," PhD diss., Boston University, 2007; Yukikazu Obata, "Against the Odds: J. M. McCaleb's Missionary Vision of Universality in the Context of Imperial Japan, 1892-1945," PhD diss., Fuller Theological Seminary, 2016.
- 12 平塚益徳「家庭学芸会の思い出」『保育カリキュラム』1970年3月、6-7頁。
- 13 平塚益徳「石川角次郎先生を偲ぶ」、石川清編『伯父 石川角次郎』講談社、1972年、157頁。
- 14 『追憶』、749。「上富坂基督教会日誌」、1920年10月3日。
- 15 平塚益徳「伝道者の父をもって」『社会教育』19巻、1964年8月、54頁。
- 16 平塚益徳「水戸高等学校青年会（報告）」『開拓者』第21巻8号、1926年8月、41-42頁；平塚益徳「伝道者の父をもって」、52-53頁；平塚益徳「比較教育学への道」『日本比較教育学会紀要』1号、1975年、1頁；廣野富雄「平塚益徳先生を偲ぶ」『福音』478号、2020年10月、20頁。
- 17 同派については以下を参照：ゲイリー・ハロウェイ、ダグラス・フォスター『概説「キリストの教会」史』小幡幸和、相川忠義訳、キリストの教会伝道学院、2010年。
- 18 平塚益徳「比較教育学への道」、1頁。
- 19 「比較教育学への道」、1-2頁。

- 20 『道しるべ』1号, 1928年6月, 4頁。
- 21 平塚益徳「私の歩んで来た道」『教育技術』1950年8月, 63頁。
- 22 平塚益徳「比較教育学への道」, 2頁。
- 23 平塚益徳「比較教育学への道」, 2-3頁。平塚はこのエピソードを, 教会の若い信者にもよく語っていたという。廣野富雄「平塚益徳先生を偲ぶ」, 20頁。
- 24 平塚益徳「比較教育学への道」, 3頁。
- 25 目黒書店, 1935年。この書は, 戦後に『旧約聖書教育思想—智慧文学の研究』日本基督教団出版局, 1957年として再版され, また「旧約智慧文学に現われたイスラエルの教育・倫理思想の研究」と題して九州大学に受理(1962年)された博士論文につながっている。
- 26 日独書院, 1937年。
- 27 平塚益徳「非国教派—近世イギリス教育史の一齣」, 東京帝国大学教育学研究室編『教育学論叢(吉田熊次博士開講三十周年記念論文集)』目黒書店, 1939年, 339。
- 28 興亜院政務局, 1940年。
- 29 『近代支那に於ける基督教々育の概況』, 67頁。
- 30 平塚益徳「伝道者の父をもって」『社会教育』19巻, 1964年8月, 54頁。
- 31 Georgia Nelson, "Japan's 'Christian Scholar' Visits ACC," Abilene Reporter News, November 30, 1950, 10頁。最も, この米国訪問の際に太平洋戦争についての考えを述べるように求められた平塚は, 「長い沈黙のあとに『誠に申し訳なかった』とだけ述べた」という(左記新聞記事内)。なお, この大学の訪問目的は自らの教派系列の大学というだけでなく, O. Filbeckという教育学教員に会うためでもあった。平塚益徳「アメリカの教育史学会」『教育学研究』19巻, 4号, 1952年, 61頁。
- 32 遠藤昭彦「平塚先生に導かれて」, 平塚博士記念事業会編『追憶—平塚益徳博士』1982年, 267-274頁。
- 33 中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」第2章 教師に対する揺るぎない信頼を確立する—教師の質の向上—, (1) あるべき教師像の明示https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1347059.htm (最終閲覧: 2020-10-30)。
- 34 <https://www.mext.go.jp/unesco/009/1387153.htm> (最終閲覧: 2020-10-30)。
- 35 平塚益徳「国民の期待にこたえる教師であるために」『文部時報』1203号, 1977年, 4頁。
- 36 平塚益徳「国民の期待にこたえる教師であるために」, 7頁。
- 37 平塚益徳「日本の教育の将来」『家庭科学』64号, 1976年, 6頁。
- 38 平塚益徳「伝道者の父をもって」『社会教育』19巻, 1964年8月, 54頁。
- 39 平塚益徳『教育持論』平塚益徳著作集V, 教育開発研究所, 128頁。
- 40 平塚益徳「日本の教育の将来」, 9-10頁。
- 41 平塚益徳「日本の教育の将来」, 8頁。
- 42 小林哲也「ユネスコ教育研究所理事としての平塚先生の思い出」『追憶』, 604頁。
- 43 ジョン・S・ブルーベッカー「平塚博士の思い出」『追憶』, 561頁。
- 44 平塚益徳「伝道者の父をもって」『社会教育』19巻, 1964年8月, 54頁。
- 45 中央教育審議会「これからの学校教育」, 4-5ページ。
- 46 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」平成24年8月28日, 2頁。
- 47 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて—」平成27年12月21日, 9ページ。https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (最終閲覧: 2020-10-30)。議論の流れについては以下を参照した: 東小川昌夫「教員に求められる資質能力について—学び続ける教員の育成を求めて—」『茨城大学全学教職センター研究報告』2019, 9-19頁。
- 48 茨城県教育委員会, 「公立の小学校等の校長及び教員の資質の向上に関する指標」, <https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/welcome/keikaku/oshirase/shihyou/3-shiyoua.pdf> (最終閲覧: 2020-10-30)。
- 49 平塚益徳『教育持論』平塚益徳著作集V, 教育開発研究所, 149頁。
- 50 北村友人, 佐藤真久, 佐藤学『SDGs時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を』学文社, 2019年, 226-234頁。
- 51 永井道雄「平塚益徳先生を追慕する」『追憶』343。

- 52 平塚益徳「国民の期待にこたえる教師であるために」『文部時報』1203号, 1977年, 9頁。
- 53 例えば, 使徒パウロの以下のような言葉がある:「わたしは, 既にそれを得たというわけではなく, 既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。……なすべきことはただ一つ, 後ろのものを忘れ, 前のものに全身を向けつつ, 神がキリスト・イエスによって上へ召して, お与えになる賞を得るために, 目標を目指してひたすら走ることです」(フィリピの信徒への手紙3:-4)。
- 54 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」平成18年7月11日, 1. これからの社会と教員に求められる資質能力(2) 教員に求められる資質能力2 今後特に求められる資質能力, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1336999.htm (最終閲覧: 2020-10-30)。
- 55 平塚益徳「中等教育を中心とした世界の中の日本の教育(昭和45年度中等教育研究協議会実施報告)」『名古屋大学教育学部附属高等学校紀要』16号, 1971年, 182頁; 平塚益徳「日本の教育の将来」『家庭科学』64号, 1976年, 11頁; 木屋和敏, 平塚益徳, 大島康正「国家意識育成の基礎」『教育ジャーナル』1970年11月, 10-19頁。
- 56 平塚益徳, 吉田昇, 古島稔, 他「座談会 愛国心を考える(2)」『教育技術』1965年11月, 83頁。
- 57 平塚益徳「日本の教育の将来」『家庭科学』64号, 1976年, 10頁。
- 58 木屋和敏, 平塚益徳, 大島康正「国家意識育成の基礎」『教育ジャーナル』1970年11月, 14頁; 平塚益徳, 吉田昇, 古島稔, 他「座談会 愛国心を考える」『総合教育技術』1965年10月, 84頁。
- 59 平塚益徳「伝道と教育」, 日本教育学会編『教育学論集』目黒書店, 1949年, 83頁。

Contemporary Issues in the Theory of Teaching Profession: An Examination of Masunori Hiratsuka's Understanding of Christianity and the Theory of Teaching Profession

Yukikazu OBATA

In this paper I investigate how Masunori HIRATSUKA (1907-1981) viewed the theory of teaching profession in relation to his understanding of Christianity. A well-known Japanese education scholar who served as Professor of Kyushu University, Director of Japan's National Institute for Educational Research, and the head of the Education Sector of UNESCO, Hiratsuka was also the son of a Japanese Christian pastor who served in Tokyo. After reviewing the life of Hiratsuka especially by noting his religious involvement and understandings, I focus on three areas that are emphasized in contemporary discussions on the theory of teaching profession, namely: 1) the importance of character, 2) the need for learning continually as teachers, and the global awareness teachers ought to have. I examine how Hiratsuka tackled these issues in light of his views on religion and Christianity.